

必須手技の「キホン」を理解！

速攻解説・基本手技⑨

Dr. 上嶋の臨床メモ

鎮静法のコツ

監修

宇部興産中央病院麻酔科部長

森本康裕

著

昭和大学医学部麻酔科学講座講師

上嶋浩順

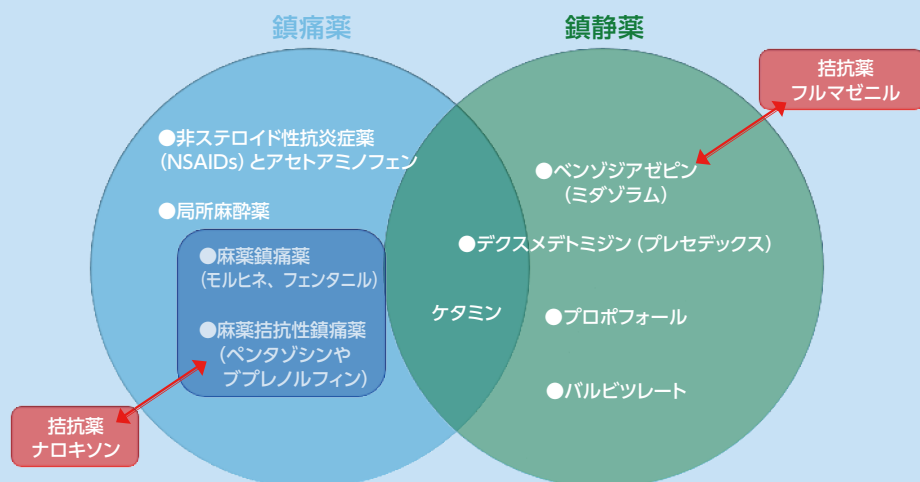
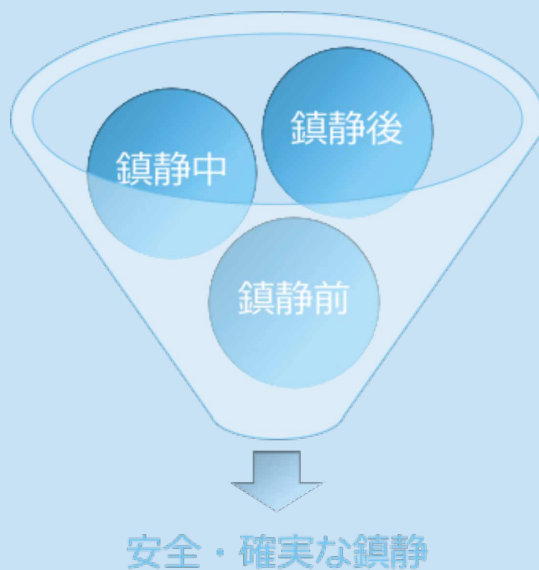
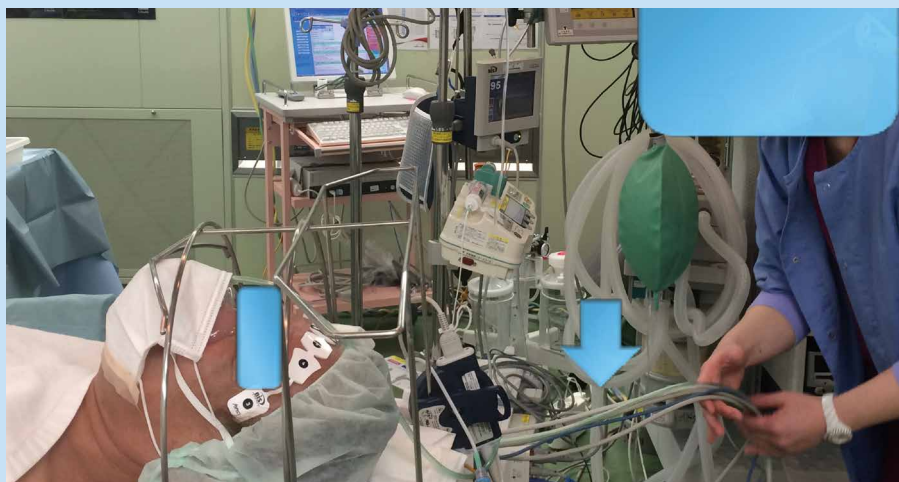
本コンテンツはハイブリッド版です。PDF だけでなくスマホ等でも読みやすい HTML 版も併せてご利用いただけます。

▶ HTML 版のご利用に当たっては、PDF データダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶ シリアルナンバー付きのメールはご購入から 3 営業日以内にお送り致します。

▶ 弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することで HTML 版をご利用いただけます。登録手続きの詳細は <https://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/> をご参照ください。

▶ 登録手続



▶ HTML 版を読む

日本医事新報社では、Web オリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶ Webコンテンツ一覧

- ▶鎮静の必要性と危険性を理解デキル
- ▶一般的な鎮静法を理解デキル
- ▶代表的な鎮静疾患を学ぶことがデキル

I .目的

1. 鎮静を行う場所は多岐にわたる

- ▶内視鏡室
 - ・上部内視鏡検査・治療
 - ・下部内視鏡検査・治療
- ▶心臓血管疾患集中治療室 (coronary care unit : CCU) ・ 放射線治療室 (interventional radiology : IIR) ・心臓カテーテル室 (血管造影室)
 - ・挿管中の患者
 - ・危険行動のある患者
 - ・不安の強い患者
 - ・体動することで検査や治療に支障をきたす患者
 - ・除細動を行う患者
- ▶手術室
 - ・静脈麻酔で処置を行う患者
 - ・処置や手技に中等度から高度の鎮静を必要とする患者
- ▶その他
 - ・医療行為を行うときに不安の強い患者

**鎮静を行う目的は「患者の不安を和らげる」ことである
決して「単純に眠らせる」ことではない！！**

コツ・ポイント・注意点

▶鎮静は

- ・多岐にわたって行われる
- ・不安を和らげることが目的
- ・単純に眠らせるのではない

講師からのコメント

- ▶鎮静は患者のために行われるものであって、決して医療従事者のために行われるものではない
- ▶目的を考え、鎮静を行う

2. 鎮静とは

❶ 鎮静は連続性である(表1)

表1 鎮静の程度による分類

鎮静				全身麻酔
				→
	軽い鎮静	中等度鎮静	深い鎮静	全身麻酔
反応性	呼名で正常反応	言葉での刺激に対し意図のある動き	連続刺激や疼痛刺激で意図のある動き	疼痛刺激を受けても覚醒しない
気道	無影響	介入必要なし	介入が必要な可能性	しばしば介入必要
自発呼吸	無影響	十分である	不十分な可能性	しばしば不十分
循環	無影響	通常保持される	通常保持される	破綻する可能性あり

(文献1を基に作成)

❷ 鎮静は安全ではない

▶利点

- ・患者の不安を取り除く(楽である)
- ・手技や治療が行いやすくなる

▶欠点

- ・意識レベルの低下
- ・呼吸抑制
- ・循環抑制

▶欠点に対する対策が必要である

- ・意識レベルの低下→嘔吐への対策、絶飲食、時間の設定
- ・呼吸抑制→呼吸状態の評価と緊急時気道管理器具の準備
- ・循環抑制→循環状態の評価と緊急時薬剤の準備

ピットフォール

▶鎮静は

- ・処置や治療中の不安を和らげる重要な手技である
- ・ただし、鎮静を行うと意識レベルの低下・呼吸抑制・循環抑制など鎮静に伴う合併症が起こりうる

講師からのコメント

▶必要な鎮静状態を提供するために、鎮静の程度を理解する

- ・鎮静を安全に行うために「意識」「呼吸」「循環」の診断を身につける

Ⅱ.では鎮静を行おう～総論～

- ▶鎮静を安全に行うためには「鎮静前」「鎮静中」「鎮静後」すべての段階で準備しなければならない(図1)